

ある不思議な事

— 芹沢光治良氏の死をめぐる —

松本 滋

著名な作家芹沢光治良氏が96歳という天寿を全うして他界したのは、昨年(1993年)3月23日のことであった。

ずっと世話されていた芹沢文子姉(光治良氏三女、東京音楽大学教授)の話によれば、氏はその日も二階の書斎で仕事をし、午後三時頃にはかの「伊藤青年」に会って話をし、夕刻、入浴をして髪も洗い、汚れをすっかり洗い流して、茶の間でテレビをつけながら夕刊に目を通していた。ふと文子姉が気がついて「あら、眠ってしまったの。起きて!」と背中を軽くたたく時には、氏はもはや帰らぬ人になっていた、という。誠に静かな春の旅立ちであった。

昭和60年(1985年)秋、「伊藤青年」との出会いから生氣を取り戻し、『神の微笑』から始めて、毎年一冊づつ長篇書きおろし小説を書き続け、平成5年1月20日には第八作目『天の調べ』を脱稿していた。88歳からの八年間、普通では考えられぬ仕事をものしたのであった。

これら一連の氏の晩年の作品には、不思議なことが数々描かれている。その中の一つに樹木との語りがある。庭の泰山木と紅梅の老木とがその主たる相手であった。樹木にも人間と同じような感情があるとよく言われているが、この泰山木と老紅梅は一人前に氏に話しかけるばかりか、和歌をも詠むという。

これは氏の小説構成上の技法と思ひ、ある時御本人に尋ねたことがある。すると驚いたことに、氏は樹木が語りかけて来るのは本当だ、決してフィクションではないと断言されたのである。恐らく魂のレベルで氏と樹木とは密接に通じ合っていたのであろう。

深層意識を深く深く掘り下げると、人間も動物も一つにつながる所があるらしい。ユングの言う集合無意識の最も深いレベルのことであらう。こ

うした次元では、当然時間も空間的隔りも無くなる。だから千里離れていても一瞬のうちにコミュニケーションが可能だし、物質的存在様態の違いを越えての交流も行われうるのであろう。

さて、芹沢光治良氏が他界した平成5年3月23日、それを地球の反対側ブラジルで察知した人がいる。この人物はなかなかの神秘的な人で、毎夜「天使」が現われ、いろいろ仕込まれたり、教えられたりするという。その人(かりにO氏と呼んでおく)は3月23日、突然「天使」から「今、芹沢光治良が亡くなった」と教えられたという。それが意外に思われたので「まさか、そんな事はないでしょう。先生は以前から115歳の定命までは頑張ると言っておられたのですから」と反論すると、それに対し「天使」は次のように教えたという。

「いや、確かに亡くなられた。それも自分から望んで…。」「ただ、この事は始めから決まっていたことである。その証拠に、絶対に間違えう筈のない所をわざと間違えて、^{しる}徴しをつけてある。(うそだと思ふなら)、『神の微笑』を再読してみよ。」

O氏が改めて精読してみると、確かに143頁に思いもよらぬ誤りがあるのを見出した。それは天理教立教にまつわる話の所で、

「天保九年三月二十三日、息子の秀司の足痛について寄せ加持を頼んだ際に、みきはやむなく加持台に立つ羽目になったが、…」

という文章である。

天理教の歴史を知る者なら即座にその中の日付が間違っていることに気付くであろう。立数のきっかけとなった最初の神がかりは、天保9年10月23日であって、3月23日ではないのである。天理教についてかなり詳しく知っている光治良氏にしては、全く信じられないような誤りだったのである。

この誤りは直ちに修正されたので、第二版以降

は“十月”となっている。初版本でもすでに直っているものが多い。小生の所持しているのは最も早い刷りの一部だったらしく、言われて調べてみたらやはりはっきり三月二十三日となっていた。小生がはじめ読んだ時に気がつかなかったのが不思議な位である。

それだけでない。“天保九年”の九年にも意味がある。氏が昭和60年に「伊藤青年」と初めて会って、「存命の親様」から天理教祖中山みきの伝記を書き改めるよう依頼され、先に述べた『神の微笑』以下の作品を書き始めてから、亡くなる平成5年という年は丁度9年目に当るのである。つまり「神のシリーズ」執筆9年の3月23日という日—それが氏の命日となるのだが—が、既に第一作の中に暗示されていたことになる。これも偶然というには余りにも不思議なことと言えよう。

もう一つ付け加えるならば、氏と親しく言葉を交していたという、かの老紅梅が、氏の他界を追うようにして枯死してしまったのである。これも単なる偶然であろうか。

この世の中には不思議なことが沢山ある。ただそれを“不思議”と見るか見ないかは、その人の心如何による。一般に我国のインテリ、とくにアカデミズムの世界に生きている人々は、不思議現象を認めたがらず、そういうことは無知な大衆に関わる事として見下しているところがある。

もちろん、不思議なことにもピンからキリまである。マスコミなどで騒がれるもろもろの心霊現象や怪奇現象が、殆どの場合真正のものでないことは言う迄もない。しかし、いろいろな現象の中には、単なる偶然や錯覚では片付けられない事象が少なからずあることも、これ又事実である。

その真実性を見究めるには、澄んだ理性と感性とが必要であるが、いずれにしても、真に不思議なことは不思議なこととして感動しながら生きた方が、より心豊かな人生を歩むことができるのではないか、と思う。

(平成6年9月23日)